

News Letter

No. 13

2025年6月発行

WEBサイトはこちら▼



お問い合わせ/広島大学大学院 人間社会科学研究所 教職開発専攻(教職大学院) 広報担当:伊藤 優
東広島市鏡山1-1-1 TEL:082-424-7166 e-mail:yitou@hiroshima-u.ac.jp https://kyoshoku.hiroshima-u.ac.jp/letter.html

新入生インタビュー

今年度入学した広島大学教職大学院の1年生にインタビューをしました。

寺戸 ●なぜ広島大学教職大学院に入学しましたか。

池田 ●自身の実践を省察し、次に活かす教員になりたいと常々思っています。その為には実践力と研究力の両方を高める必要があります。その点において理論と実践の往還を重視する教職大学院が理想の進路でした。

寺戸 ●実際に入学してみてもうですか。

池田 ●教育学部ではない学部出身の同期先輩、現職院生といった多様な経験や考えをもった方と講義で交流することで、多くの学びを得ることができました。また、小学校教員の課題として教科専門性の低さがしばしば指摘されますが、その専門性を培うために自身の研究と向き合う時間が豊富にあるのも魅力に感じます。頭が疲れる毎日ですが、とても有意義な時間を過ごせています。

藤岡 ●どのようなきっかけで広島大学教職大学院に来られたのですか？

中村 ●総合的な探究(学習)を軸とした中高6年間のカリキュラムを作るために、大学院で学びたいと思ったのがきっかけです。

藤岡 ●実際に入学してみてもうですか？

中村 ●とても充実しています。自分が作ってきた概念について、議論を通して問い直せることが楽しいです。

藤岡 ●ストレート院生(学部卒院生)と勉強されてみてどのよう感じられますか？

中村 ●現職院生はみな同じ思いだと思いますが、ストレート院生の



インタビューの一場面

写真左より▲

学校マネジメントコース1年(現職院生)
花野 由香里

教育実践開発コース1年(現職院生)
中村 拓哉

教育実践開発コース1年(ストレート院生)
前園 彩花

教育実践開発コース1年(ストレート院生)
池田 誠

教育実践開発コース2年(ストレート院生)(インタビュー)
藤岡 真菜

教育実践開発コース2年(ストレート院生)(インタビュー)
寺戸 彩乃

執筆 インタビュアー **藤岡 真菜**
寺戸 彩乃
(教育実践開発コース2年)

みなさんのことを、教育について真剣に考えることができる対等な関係だと思いつつ同時に、みなさんには尊敬の気持ちを持つています。現職院生が言うことを正解と捉えず、いろいろな意見をぶつけてほしいと思っています。籍により良い教育について語り合いたいです。

寺戸 ●次のテーマについてですが、これからの2年間でどのような研究をしたいと考えていますか？

前園 ●数学科において、概念形成を促すジグソー法について研究したいと考えています。数学におい

て、多くの生徒が公式や図形の性質などを暗記しないと問題を解けないと考えているかもしれせん。それらをジグソー法を用いて生徒が「発見」という形で、本質から理解できるように授業を開発したいと考えています。

花野 ●「学び続ける教師」が育つ組織づくりについて研究していきたいです。授業研究は教師を育てる力とともに、学校を育てる力を持つていきたいと思います。教師たちの協働に基づく実践により同僚性を構築し学習する組織の礎を築いていきたいと思います。研究を通して、教師同士が互いに学び合うコミュニティ文化の醸成にも努めていきたいです。

執筆 インタビュアー **藤岡 真菜**
寺戸 彩乃
(教育実践開発コース2年)

大学院生として初めて、2年間かけて進める研究のテーマを発表しました。

研究テーマ発表会



新入生が研究テーマについて発表している様子

5月20日に研究テーマ発表会が行われました。この会は1年生が2年間かけて進める研究のテーマを発表する場であり、これまでの学びをもとに研究の目的や方法、2年間の計画について発表します。入学してから1か月半という短い期間でしたが、主にゼミの時間を活用して、自身の興味関心と照らし合わせながら過去の研究に関する論文を読んだり、指導教員や2年生から助言をもらったりして試行錯誤してきました。そのような1年生の発表はとても興味深く、これからの進捗が楽しみなものでした。また、この会は大学院生として初めて発表する場です。参加された大学教員や2年生からの質問に答えている様子から、スタートばかりの研究を少しずつ前に進めようとする意欲が感じられました。本日の会で1年生がこれまで以上に自己の研究に向き合い、よりよい成果を得られることを期待しています。

執筆 **坂川 大樹** (教職実践開発コース2年)

授業紹介

『学校経営の理論と実践』

担当 曾余田 浩史先生・藤田 典生先生

「学校経営の理論と実践」の授業は、①「探究・創造・協働の学び」を追求する学校づくりに必要となる組織マネジメントの基本的視点(目標管理、ミッション、アウトカム、知識創造経営、組織学習、等)を学び、②学校の成熟や「地域とともにある学校」等のテーマに関する事例を取り上げ検討します。それらの活動を通して、学校の教育活動全体を俯瞰し、新しい学校づくりを担うマネジメントの力を育成することを目的としています。

授業ではまず、「大学院で研究する自分」のミッションやビジョンについて深く考え、セルフ・マネジメントシートの作成に取り組みます。次に、クラス内でチームを編成し、チームごとに授業に対するアウトカムを追求するためのミッションを考え、共同で課題に取り組みます。その内容は、チームごとに組織マネジメントに関する文献調査を行い、その内容と論点をクラスで発表するというものです。また、授業ではその発表を受けてクラス全体で議論を行います。授業を重ねるごとにマネジメントに必要な気づきを得ながら自分と向き合い、それとともにチームを「学習するチーム」へと成長させていきます。また、授業の中ではコミュニティ・スクールのあり方といった具体的な事例についてチームで検討し、マネジメント理論の実践への生かし方についても探究します。

このように、この授業では「私たちは何のために、誰のためにアクションを起こすのか?」という問いを追求し、「学習する組織」としての新しい学校づくりを進めるための力を培います。

執筆 **中田 翔平** (学校マネジメントコース1年)

「数学科における自律的な生徒を育む授業に関する研究」

井上 翔太 (教育実践開発コース2年)

予測困難な時代となっている現代において、課題を解決するために、「自分で考え、判断し、行動できる」ような、自律的な生徒を育むことが重要です。数学の授業では、課題そのものに対して、自分の力で考えたり、他者とともに考えたりすることが求められます。さらに、課題を解決するための最善の行動を自分で判断し、行動する力も大切です。そこで、全員が協働で課題解決を目指す授業である、『学び合い』の考え方を援用した授業を実践することが有効だと考えます。そして、生徒、教師、環境の三つの構成要素間の関係に着目することが、日本の求める主体的な活動の指導観に近いとされています。そのため、この視点を授業分析に適用したいと考えています。今後の研究では、授業実践と授業分析の理論的枠組みを構築し、授業の実践と分析をくり返すことで、より優れた枠組みを確立していきたいです。そして最終的には、その枠組みが自律的な生徒の育成にどのように寄与するかを検討したいと考えています。

私の研究

院生の研究内容をご紹介!

「小学校における文字文化を軸においた書写授業の展開」

高尾 彩花 (教育実践開発コース2年)

ICTが普及している時代において、手書きで文字を書く意義とは何だと思いませんか?特に筆と墨を使って文字を書くことに意義はあると思いませんか?私は、現代、そして未来において、「正しく丁寧に文字を書けるようになるための書写」だけでは、小学校での書写の意義が揺らいでしまうのではないかと考え、「文字文化」という言葉を一つキーワードに、新たな書写教育の可能性について研究しています。具体的には、①文字表現と自己表現 ②毛筆の伝統・文化・歴史的側面への理解という2つの可能性を理論として提案し、実践へと繋いでいきたいと考えています。以前実施したアクションリサーチ実地研究では児童1人1人が書きたい秋の言葉を選び、自由にイメージして書いてもらいました。手本はありません。児童一人一人の個性が溢れ、一つとして同じ作品はない創造性に満ちた活動となりました。今後は、国語科の伝統的な言語文化と関連させ、書の世界観を少しでも授業で実現できないかと考えています。

ご指導いただいている先生方の教育・研究より

先生のおすすめの1冊

ボールに触っていない子どもがいる授業を見て、本当に大事なことを見落としていたのではないかと改めて考えるきっかけになった一冊です

大後戸 一樹 先生

おおせど かずき

大学院人間社会科学研究所 教授
専門分野: 体育科教育



大後戸先生は体育科教育を専門に研究をされています。

今回おすすめいただいた本は、『体育実践の見かた・考えかた一評価・評定問題を核にして一』(中村敏雄著 大修館書店 1983)です。この本は大後戸先生が大学3年生の時、広島大学に赴任されてきた中村敏雄先生が担当されていた授業のテキストです。

この本の印象に残っている場面として、バレーボールの授業中に1回もボールに触っていない生徒がいたというデータを見たときのことを挙げられました。ボールに触っていない子どもがいる授業を見て、自分は本当に大事なことを見落としていたのではないかと感じ、授業のつくり方を改めて考えるきっかけになったとおっしゃっていました。

また、「体育では本来評価できないものを評価しようとしていないか」と問いかけられ、衝撃を受けたと語られていました。「諦めない力」や、「楽しさ」などが、目標としてかけられることがあるが、それは本当に評価可能な内容なのか、体育で教えられるものなのか、評価できない目標をかかげてもいいのかといった、評価に関して多くの問いや気付きを与えてくれる一冊だそうです。

評価できるかどうか疑わしい目標を平然と掲げてきたことへの自戒の意を込めて、折に触れ、自身の体育実践を考え直す示唆を得ているとおっしゃっていました。



『体育実践の見かた・考えかた一評価・評定問題を核にして一』(中村敏雄著 大修館書店 1983)

執筆
長谷川 智章
(教育実践開発コース2年)
手島 市裕
(教育実践開発コース1年)

「音楽を『図鑑』にするとしたら?」ページをめくるたびに世界を旅しているような気持ちになれる本です

寺内 大輔 先生

てらうち だいすけ

大学院人間社会科学研究所 准教授
専門分野: 音楽表現と音楽教育



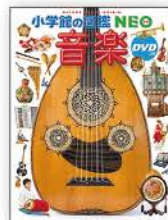
寺内先生は、音楽教育や音楽表現に関わる研究・実践に取り組まれており、特に音楽づくり(創作)に関する論文を多数発表されています。また、音楽表現の分野では作曲家・即興演奏家としても活躍されています。

今回先生がおすすめされたのは、『小学館の図鑑NEO 音楽』(小学館 2023)です。先生は開口一番、「『音楽』の『図鑑』ですよ。もしあなたが図鑑をつくるとしたら、どんな内容にしますか?」と問いかけられました。「図鑑NEOシリーズ」は「昆虫」「宇宙」「魚」など様々なテーマを扱っていますが、形のない「音楽」は視覚化しにくい図鑑になるイメージがありませんでした。

寺内先生はまず、世界の多様な音楽文化の紹介に力を注いでいる点に感動したそうです。たとえば、豊作を祈って歌うこと、酒場で歌い演奏する習慣、お祭りやお葬式など、音楽文化の多様なあり方が、地理・歴史とともに紹介されており、ページをめくるたびに世界を旅しているような気持ちになれるとおっしゃっていました。

さらに、QRコードから音源にアクセスできる点も魅力で、「この楽器はどんな音?」「この音楽はどんな雰囲気?」などの興味にすぐに応えてくれる一冊となっているそうです。

図鑑の魅力はもちろん、それを熱く語る先生の姿も印象に残りました。



『小学館の図鑑NEO 音楽』(小学館 2023)

執筆
薦池 明日香
(教育実践開発コース2年)
島田 奈千花
(教育実践開発コース1年)

「本物は続く、続けると本物になる」本物を真摯に追いかけて続ける又野先生の英語教育の実践が具体的に掲載されています

又野 陽子 先生

またの ようこ

大学院人間社会科学研究所 准教授
専門分野: 英語科教育



又野先生は、英語科教育や初等中等教育学等をご専門とされています。英語に関して、公立中学校での教諭や小中一貫コーディネーターの経験を活かして、児童生徒が困難を感じることなく意欲的に授業に取り組めるような学習指導の研究をされています。

又野先生のインタビューを通して「本物を大切にしたい」という強い思いが伝わってきました。どんな時代でも捨ててはいけない本物の教育がある。又野先生がおすすめされた「あえて問う 英語教育の原点とは オール・アプローチと山家保」(山家保先生記念論集刊行委員会編著 開拓社 2005)はそのあり方を示しています。又野先生ご自身も何度も読み込んで実践され、その大切さを実感されたそうです。又野先生が執筆された『はじめてのオールイングリッシュ授業』(又野陽子著 明治図書 2017)にもその思いが込められています。この本には本物を真摯に追いかけて続ける又野先生の実践が具体的に掲載されています。

又野先生は「本物は廃れることはない。だから原点、本質は何なのかということを持っていてほしい。そして、そのことを投げ所として、その先にいる子どもたちにとってよくわかる授業、楽しい授業をつくるための礎となる研究を積み重ねてほしい」と語ってくださいました。私たちは何のために教職大学院へ進学したのか、もう一度原点に立ち返って学び続けていきたいと強く思いました。

『はじめてのオールイングリッシュ授業』(又野陽子著 明治図書 2017)



執筆
奥野 夏帆
(教育実践開発コース2年)
新畑 歩佳
(教育実践開発コース1年)



『あえて問う英語教育の原点とは オール・アプローチと山家保』(山家保先生記念論集刊行委員会編著 開拓社 2005)

編集後記 / 第13号

ニュースレター第13号をご覧いただきありがとうございます。今回は、4月に新しく迎えた新入生へのインタビューを掲載しました。新たなメンバーと共に今年度も学び合えることに胸が高鳴りました。今後もニュースレターでは、広島大学教職大学院の日々の様子や取り組み等をお伝えしてまいります。

担当 / 澤田 友穂
(教育実践開発コース2年)